

神奈川県立生命の星・地球博物館

友の会通信

Vol.18, No.3, 通巻85号 2014.9.15 発行

目次

身近な自然シリーズ…1～2 わたしの選ぶ“この一冊”…7

活動報告……………3～6 友の会会員より ……………8

情報クリップ……………6 行事案内……………9～10

身近な自然シリーズ (その40)

横浜の里山

学芸員 田中 徳久

■はじめに

連載当初の経緯の正確なところは失念したが、もともと、ここでの「身近な」は「博物館周辺」ということであったように思っている。しかし、連載も回を重ね、学芸員の執筆も複数回に及ぶとつらくなってくるようで、非常に多岐に渡る「身近な」自然について書かれている。「博物館周辺の身近な不自然」（自然でなく不自然だし）はともかく、「小笠原諸島から新種の寄生蜂を発見！」（海の向こうだし）や「ニュージーランドの不思議な形のきのこを求めて」（もっと海の向こうだし）までである。順番では、私は南極についてでも書くしかない…（決して他の学芸員の原稿を責めているわけではありません）。

そんな状況の中で、今回は少し視点を変え、私自身にとって「身近な」自然について、書き記したいと思う。それも、正確には「身近だった」との過去形になるのだが。

■舞岡の里山・谷戸景観

私が生命の星・地球博物館に、植物担当の学芸員として勤めているのは、大学時代に植物生態学を専攻したことが直接的な結びつきであるが、そもそも大学で植物を学ぼうと思ったのは、高校時代に生物部に所属し、植物班に属して活動していたことが始まりである。私の通っていた高校は横浜市港南区の野庭町にあり（ここまで書くと学校名もばれるが）、学校周辺には水田や畑などの農耕地、雑木林などが残っており、よく観察に出かけた。その観察地のひとつが学校からは少し離れるが舞岡（現戸塚区舞岡町）であり、重要な観察地であった。現在の舞岡は、舞岡ふるさと村や舞岡公園が整備されているが（図1）、当時は水田耕作も広く普通に行われており、周囲の雑木林も活用されつつも微妙に放置されている里山景観が広がっており、水田や畑地の雑草



図1. 谷部には水田が開かれ、周囲を雑木林が取り囲む舞岡の里山景観（戸塚区舞岡町 2006年9月23日 田中徳久撮影）

や、雑木林の林床を彩る草花を四季を通じて楽しむことができた。私たちは、毎週そこを訪れ、観察した植物を記録する活動をしていた。今にして思えば、分類が難しい（あるいは詳しい先輩や顧問の先生がいなかった）シダ植物やイネ科、カヤツリグサ科の植物はほとんど記録されていない不完全なものであったが、現在の私の植物に関する基礎知識はそこで培ったもので（今はカヤツリグサ科に詳しい先輩はいるが私の能力はあまり変わっていない）、その意味で、非常に「身近な」自然だったのである。余談だが、後年、当時の県立博物館を訪れ、その観察記録の一部を神奈川県植物誌調査会の連絡誌Flora Kanagawaの35号に掲載して貰った（図2）。

■舞岡のウメバチソウ

この舞岡での植物観察の中で今でも印象に残っているのはウメバチソウ（ユキノシタ科）の発見である。ウメバチソウはいわゆる里山の植物ではないので、本稿の主旨には合わないがやはり紹介したい。この発見の前、夏休みの合宿で山梨県の入笠山を訪れ、多くの高原性の植物と出会い、それこそ身近でない自然を満喫した。その興奮も少し冷め、植物の名前を忘れかけた頃、入笠山で出会ったウメバチソウを舞岡で発見したのである。一同、大興奮であった。ただ、その時の活動は観察が主で、採集し標本作製することは行っていなかったため、このウメバチソウも写真だけが残っている（開花しているのは2株だけであったのでどちらにしる採集はしなかったであろう）。そして、このウメバチソウ



図2. Flora Kanagawaの「舞岡谷戸の植物」の記事 (Flora Kanagawa No.35, 384-385頁)

の写真、先ほどの舞岡の植物観察記録と同様、後年、当時の県立博物館を訪れ、資料として提供した。現在も、写真ではあるが台紙に貼られ収蔵庫で保存されている(図2)。ただし、写真なので標本番号は付されておらず、博物館の情報システムにも登録されていないので、今後、資料としての管理方法を考えたい。

■円海山

この原稿を書くにあたって昔のことをいろいろ思い出した。高校で生物部に入ったそもそもの発端を思い起こすと、小学校時代に、担任の先生に連れられて円海山(現横浜市港南区ほか;現在の氷取沢市民の森や瀬上市民の森など)に出かけ、サワガニ(植物ではないが)を採ったりした自然体験が大きいように思う。実はこの円海山一帯も横浜を代表す



図3. 台紙に貼られた舞岡で撮影したウメバチソウの写真。暗い場所での撮影で写真の出来は悪いが貴重な1枚である(戸塚区舞岡町 1984年11月17日 田中徳久撮影)

る一大緑地であり、里山景観が主体となっている場所であり、高校の部活動でも数度となく訪れた場所で、私には馴染みの深い、「身近な(だった)自然」である。

せっかく「身近な自然」に関する原稿を寄せる機会を頂き、「横浜の里山」と題して書き記してみたが、読み返すと「自然」に関する記述の少ない原稿となってしまったが、お許し願いたい。最後に、博物館の観察会で舞岡や円海山に出かけるのもその当時の記憶と土地勘があるからであり、いまだに進歩がないことを書き添えておきたい。



図4. 竹林やスギ・ヒノキの植林、雑木林などがモザイク状に広がる円海山の景観(港南区舞岡町 2014年4月20日 田中徳久撮影)

◆ 活 動 報 告 ◆

● 植物観察会 ●

『箱根駒ヶ岳』

2014年5月7日(水)／箱根駒ヶ岳頂上付近／42名／
講師：勝山輝男学芸員

箱根園からケーブルで駒ヶ岳に着く。すぐ下の斜面に吹き渡る寒風がミヤマクマザサを撫でている。その中の岩にぴったり身を寄せてハコネコメツツジの株がいくつかありました。黒緑の小さな葉、花は7月頃で絶滅危惧種とか。いつか見たい花です。散策路へと楽しい観察が始まりました。



鞍部にて質問時間



リョウブの新芽

赤っぽい芽吹きのリョウブ、マルバダケブキやトリカブトの葉、キクザキイチゲの青・白・ピンクの花が此処かしこ、トウカイスミレ、シコクスミレ、オトメスミレ、コウグイスカグラと春のお花畑が素晴らしいです。ヤマグルマは被子植物でありながら裸子植物の仮導管を持つ生きた化石だとの面白い説明がありました。(おざき たけすえ こいそ)

● よろずスタジオ ●

『クジラと人間は仲間？』

2014年5月18日(日)／大人28名、子ども17名／講師：広谷学芸員

動物の骨、特に哺乳類の前足の骨に着目してのよろずスタジオは新鮮でした。もちろん、足が何本の骨できているのかとか、どこにくっついているのかという事は漠然とは分かってはいましたが、イルカ、コウモリ、モグラ、キツネ、ウシなどの骨(今回は前足の骨)が私たちの腕(前足)と同じ数だけあり、同じ構造だという事、当たり前のことですが、再認識した時間でした。中でも興味深かったのは前足の骨の中でも肩に近い一番上の骨の形を比べたとき、環境・生活の仕方・生き方の違いによって全く違う形をしていることでした。

細くてとっても長い骨を持つコウモリ、太くて短いクジラ、土を掘って移動するモグラの手や腕の骨も変わっていました。(佐々木あや子)



カマイルカの前足(ひれ)の骨



これは誰の手でしょうか？

● 地学G地話懇話会 ●

『皆さんの知らない丹沢ざくろ石流紋岩の話』

2014年5月28日(水)／博物館西側講義室／26名／講師：山下浩之学芸員

会場に着席してみると1枚の質問用紙が配布されていました。

「神奈川県山北町西丹沢に産するざくろ石流紋岩について、次の1



山下乡学芸員の地話懇話会風景

～20の中で知っているものにチェックしてください」と書かれています。えっ！これをチェックして提出するのかな？と一瞬緊張が走りました。20の質問と葛藤。チェックを入れられたのはわずか8問でした。懇話会が始まると講師の山下乡学芸員から「皆さん、その質問はどれだけ出来ましたか？実は私自身も分からないものも入っています」との説明があり、一先ず落ち着きました。

はじめに流紋岩の説明があり、続いて丹沢ざくろ石流紋岩について、岩体の長さや方向、岩体幅の特徴、K-Ar年代測定結果、石基中にもざくろ石があること、ざくろ石の化学組成、自形ざくろ石や樹枝状ざくろ石の成因に係わる検討、更に樹枝状ざくろ石の先端に見られる燐灰石などの説明があり、すっかりざくろ石の世界に引き込まれてしまいました。懇話会が終わってみるといつのまにか冒頭質問書のほとんどに答えられている自分に気がきました。とても良い懇話会を経験させて頂きありがとうございました。(永幡寛三)

◆友の会地学G 6月5日：『河原の石シリーズ…PART 2 酒匂川水系の段丘礫を観る』は講師の都合により中止となりました。

● 出前講座 ●

『変形菌を観察してみよう！』

2014年6月1日(日)／茅ヶ崎市清水谷／23名／講師：友の会会員 矢野倫子(博物館外来研究員)



清水谷の森で採集



採集後、変形菌について説明

『清水谷を愛する会』の依頼で2回目の変形菌観察会を行った。今年の高気温を各地で記録したこの日、変形菌はどんなものか、どんなところを探すのかという簡単な説明の後、元気な小学生を先頭に観察隊は清水谷の森へ出発。池の側の落葉がたまっている斜面でまず「ホネホコリ」が見つかった。子供達が次々と見つけ「やったぁ！見つけた」の声に大人も一生懸命。倒木でも「モジホコリの仲間」や「シロウツボホコリ」「カタホコリの仲間」等、4、5種が見つかった。その後、変形菌の子実体のしくみや以前の清水谷調査で確認された種の説明をし、皆が採集した子実体を実体顕微鏡で観察した。

(矢野倫子)

● 樹木観察基礎講座 ●

『ブナ科の自然誌』

2014年6月14日(土)／博物館実習実験室／16名／講師：樹形研究会代表 八田洋章氏(国立科学博物館名誉研究員)

初めて植物の講座に参加しました。前半の説明でブナ・コナラ・クリの殻斗の違いを再認識し、日本だけでなく世界の分布や成長の様子が違うことなど、どんぐりの木と一括りに見ていたものにも、それぞれ個性があることに驚かされました。

2年かかって成長するどんぐりがあることは知っていましたが、えっ、実際のサンプルで先生の説明に聞き入る皆さん受粉から受精まで1年かかるの？ だから2年目で



講義の後は持ち寄ったサンプルで新たな発見です



実際のサンプルで先生の説明に聞き入る皆さん

どんぐりになるのか〜?! また、ブナ属以外は発芽が地下子葉型であることにも興味を感じ、発芽の様子を観察してみたくもなりました。

そして木の枝を手に取り観察が始まると、さらに再発見もあり、遠くで見るだけだった樹木がより身近なものになりました。(遊亀房子)

● 第111回 サロン・ド・小田原 ●

『身近な水辺に棲む魚たちの保全』

2014年6月14日(土)／第1部生命の星・地球博物館講義室、第2部レストラン・フォーレ／講演27名、交流会11名／話題提供者：宮崎佑介氏(日本学術振興会特別研究員)

今回の話題提供者は、日本学術振興会特別研究員として生命の星・地球博物館にて研究活動されている宮崎佑介さんです。



講師の宮崎氏

高校生の頃から地球博物館で標本を作製しており、去年から特別研究員として博物館に来て魚の保全について精力的に活動している、といった瀬能学芸員による紹介のあと、宮崎さんより、どうして魚の保全に興味を持ったのか、また、どういう活動をしているのか、その過程も含めお話が始まりました。

魚に興味を持ったきっかけが、スーパーファミコン「海釣り名人スズキ編」であること、小学生の時に海釣りですった魚を調べるのに図鑑を購入、中学では接写カメラに凝り、高校で釣った魚をホームページで公開、また、博物館で魚類ボランティアとして活動、といった研究のきっかけとなるお話から、岩手県でお寺の和尚さんとの初の民間主導の自然再生事業の実施、北海道宋太川水系での地域との協働による生物多様性保全活動、小中学生を対象とした自然体験学習の講師など、地道な調査や活動による保全活動の取り組みが紹介されました。

第2部の交流会ではひとつのテーブルを皆で囲み、和気藹々とした中での交流会となりました。

(鈴木智明)

● よろずスタジオ ●

『葉脈標本をつくらう！』

2014年6月15日(日)／博物館3階実習実験室／69名／スタッフ7名

すでに薬品処理してある葉っぱはヒイラギ、キンモクセイ、ツバキ、ヒイラギモクセイ、ブナ、クチナシ、マルバウツギ。それぞれ気に入った葉っぱを選んでつくりはじめました。ヒイラギやヒイラギモクセイは扱いやすいというアドバイスもあって、ヒイラギが一番人気です。子どもさんに付き添ってきたお父さんも最初はそばで見えていましたが、しだいに興味が出てきたようで、葉脈が少しでも残らないように時間をかけて仕上げるお父さん、少しくらい葉脈が残ってもそこがいいのよとばかりいろいろな葉っぱに挑戦するお母さん、「優しく丁寧に…」という説明をしっかりと守って、歯ブラシをそとそと動かしている子どもたち。(佐々木あや子)



真剣に葉っぱ選び

わたしとパパの作品です

● 土の中の虫ウォッチング ●

『ミミズと土の中の仲間たち』

2014年7月5日(土)／実習実験室／26名／講師：皆越ようせい氏(土壌動物写真家)／スタッフ6名



3階テラスでハンドソーティング

ミミズの観察スケッチ

午前中から雨が予想されたので、残念ながら野外でのハンドソーティング(白いシート上に土をふるい落とし、目で虫を探し採集する実習)は、3階テラスで行った。午後からはミミズを実体顕微鏡で観察し、観察シートにミミズの図を描き、大きな口や環帯も観察した。その後、午前中に採集した虫達とツルグレン装置で落ちてきた小さなダニやトビムシを観察し、多種の虫達が関わり合いながら土を作っていることを学んだ。先生からはミミズの生態のお話を聞きながら、長年かけて撮影された写真を見せていただいた。

また、樽学芸員からはミミズの図鑑や絵本に登場した当館収蔵の環形動物の化石を見せていただき、ライブラリーの司書さんからは、『図鑑の調べ方』

について解説してもらった。以上、様々な観点から土の中の虫を知ることが出来た。(矢野倫子)

『変形菌を観察してみよう!』

2014年7月21日(月)／実習実験室／20名／講師：萩原博光氏(国立科学博物館名誉研究員)／スタッフ6名



萩原先生のおはなし

落ち葉についた変形菌を採集

午前中は、先生に変形菌の探し方のお話を聞いた後、入生田丸山からしだれ桜広場まで採集しながら登った。昼食の後は博物館に戻り、自分で採集して来た変形菌を実体顕微鏡で観察し、属までの名前調べに挑戦した。変形菌は大きくても3mm位までのものがほとんどで、最初は野外での採集は難しいが、一度出会うとその形や色の美しさから夢中になる人は多い。

参加者からは、野外での変形菌探しが楽しかった、実体顕微鏡観察が面白いなどの感想があった。マメホコリ、シロジクキモジホコリ、ホソエノヌカホコリ、キササズキホコリなど12種が採集出来た。最後にそれぞれの変形菌をCCDカメラでスクリーンに映し、皆で観ながら、萩原先生の解説を聞いた。

(矢野倫子)

● 地学G地話懇話会 ●

『放散虫化石から読み解く三浦半島形成の起源』

2014年7月23日(水)／博物館西側講義室／21名／講師：神奈川地学会副会長 鈴木進氏

原生動物の放散虫化石の群集から地層の年代や環境を読みとれると考え、研究されている講師の鈴木さんには驚きました。大変なご苦労があったことと思います。

私は今回初めて放散虫という言葉を知りました。放散虫について調べてみると、原生動物肉質網放散虫目に属し、体は直径数十マ



鈴木進氏の地話懇話会風景

イクロメートルから数ミリメートル、多数の放射状の仮足を出し、多くはケイ酸または硫酸ストロンチウムの骨格を持っている。外方へ放射状に発達する仮足には、中心部を貫き外方へ突出する長くて直線的な有軸仮足と外質表面より出る細かい糸状仮足の2種類があり、仮足を出してケイ藻類、原生動物等を餌にして、終生浮遊生活を送り、死骸は軟泥として海洋底に蓄積する。その放散虫の種類は、一万数千種で、表層で生息しているものもから、深海まで、地球上の海のあらゆるところに生息していて、浅海で生息しているものの中には、光合成をする褐虫藻が共生しているものもいるとのことでした。鈴木さんから、多種多様な環境で生息する放散虫の化石の種類や群集を調べることで、その土地の環境や年代を推定することができるという話を興味深く聞かせて頂きました。ケイ素と、酸素と、水で構成されている生物が地球の歴史を淡々と記録していることが実感させられた講義でした。これからの研究の成果も楽しみにしています。(山口 栄)

● 子ども自然科学ひろば ●

『箱根火山の火山灰をしらべてみよう』

2014年8月1日(金) / 博物館実習実験室 / 290名 / 講師：笠間友博学芸員



お孫さんのためなら
ジジイも頑張ります…



チビっ子達で超満員の
テフラ洗い会場

「キラキラして宝石みたい！」顕微鏡を覗いて初めてみる火山灰に含まれる鉱物の様子に、ほとんどの参加者は目を輝かせていました。

正直、参加者の多さと熱意に驚きました。火山灰という専門的なテーマにかかわらず、1日で280名(スタッフ含めて290名)の参加がありました。

火山灰から鉱物を洗い出す作業は結構手間がかかりますが、多くの方々が丁寧に根気強くされていました。その洗い出した鉱物を講座の記念として、大切に持ち帰っていたのが印象的でした。

また、私が顕微鏡観察の補助をした際、参加者から火山灰や鉱物に関する質問を沢山受け、もっと勉強しなければと反省させられました。

今回の講座を通して日々地学ボランティア活動をしている友の会の方々から大変多くのことを教わりました。作業の手際良さや知識の多さに改めて感服しました。今回の経験を今後に生かしていきたいと考えています。(小林真由美)

〈情報クリップ〉



● 会員数 483名 平成26年8月9日現在
(正会員 482名、賛助会員 1名)

● <特別展「どうする?どうなる!外来生物
~とりもどそう 私たちの原風景~>は
もうご覧になりましたか?

開催期間: 7月19日(土) ~ 11月3日(月)

会員の皆さまへは、特別展の招待券付はがき1枚(2名まで)をお届けしております。この機会にご家族・ご友人をお誘い合わせのうえ、博物館へ足を運んでいただくと幸いです。

● <特別展関連講演会

「外来生物対策の現場から」>のご案内
(当日受付: 先着300名)

日時: 10月18日(土) 13:30~16:00

場所: 博物館SEISAミュージアムシアター

演者: 高田昌彦氏(琵琶湖を戻す会代表)

田口勇輝氏

(広島市安佐動物公園飼育技師)

西原昇吾氏(東京大学大学院)

● <子ども向けワークショップ よろずスタジオ>

実験や観察、工作を通じて、自然科学を身近に感じることができる体験型イベントです。

時間: 13:00~15:00

場所: 博物館1階 講義室

参加費: 無料

申込み: 不要(当日受付)

◆ 9月28日(日) 「そらとぶたね」

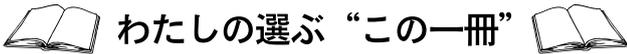
◆ 10月4日(土) 「生きものパズル」

◆ 10月5日(日) 「恐竜の折り紙ひろば」

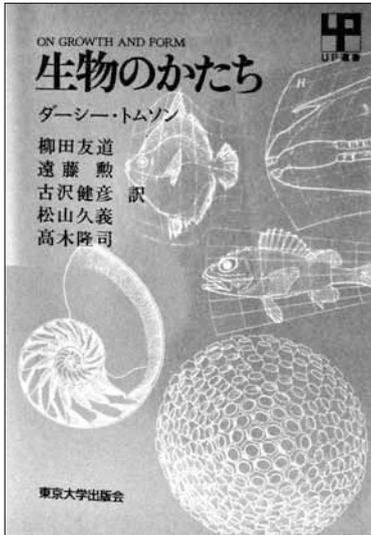
◆ 10月11日(土) 「ぬり絵ひろば」

◆ 10月12日(日) 「ハコフグ帽子のぬり絵」

イベントは都合により変更する場合があります。詳細は博物館ホームページをご覧ください。か、当館までお問い合わせください。


 わたしの選ぶ“この一冊”

『生物のかたち』



ダーシー・トムソン
『On Growth and
Form』抄訳

柳田友道・遠藤 勲
古沢健彦・松山久義
高木隆司 訳
初版1973年

(写真は1992年発行
の第7刷)

東京大学出版会

学芸員 佐藤 武宏

『生物のかたち』は1973年初版発行の古い本です。原著は1917年初版発行のダーシー・トムソンの大著『On Growth and Form』ですが、本書はそれをコンパクトにまとめた抄訳です。わたしが所有しているのは1992年発行の第7刷なので、多分大学院生の頃に初めて手に取ったのでしょう。

本書は第1章「序章」と第10章「むすび」を含めた10章から構成されています。

第2章「生物の大きさと行動」では、からだのかたちやサイズが遊泳、歩行、飛翔などの行動に制約を与えていることが示されています。続く第3章「細胞のかたち」では、変形する油滴のかたちを原生動物の形態と比較したり、ミルククラウンの形状と刺胞動物のポリプを比較したり、水に落としたりした一滴のインクが広がりながら落下していく様子をクラゲの形態と比較したりしています。第4章「組織細胞または細胞集合体のかたち」では、トンボの翅の網目模様や藍藻類の細胞連鎖の様子、ミツバチの巣の部屋の形状と配列などについて、物理学的、幾何学的に説明しています。この議論をさらに展開させ、第5章「針骨とその集合体構造」ではカイメンや放散虫の骨格の構造や対称性について述べています。

第6章「らせん構造」と第7章「つのと牙のかたち」で取り上げられる主題は「らせん」と「成長」です。巻貝や有孔虫のような外骨格生物が相似形を保ちながら成長するときのかたちであるらせんを取

り上げ、その特徴について解説しています。そして、内骨格生物でも付加成長をする器官、つのと牙や爪といった部分にも同じように等角らせんが見られるということを紹介しています。

第8章「かたちと機械的強度」では生物のかたちと運動の関係を構造力学的に考察しています。動物の骨格を建築物の骨組みととらえ、力の掛かり具合やひずみの解析から運動やからだの支持を解釈するのです。

第9章「かたちの変換と比較」は本書で最も有名な章かもしれません。「デカルト変換格子」を用いて数学的に形態変形を行うことにより、動物の形態の多様性を説明しようとしています。簡単にいうと、よく伸びるゴムのシートの上にズキやハタに似た魚の絵を描き、その一部を引っ張って伸ばしたり縮めたりすれば、クルマダイにも、カサゴにも、ヒシダイにも似た魚の姿になりますよ、オオエンコウガニの絵を書いて同じようにすれば、イガグリガニにも、ワタリガニにも、ケアシガニにも似たカニの姿になりますよ、という発想です。

このような考え方は、今では当たり前だったり、時代遅れだったりするかもしれません。しかし、それぞれの章で述べられたことは、アロメトリーやスケーリング理論、生物形態の流体力学的解釈、機能形態学、生物統計学、幾何学的生物測定学、理論形態学、生物物理学といった、今日、生物のかたちを取り扱うありとあらゆる分野の基礎となっているといっても過言ではないのです。当館の生物・古生物系学芸員のほぼ全員が、多少なりとも直接的、間接的にトムソンの影響を受けているはずですが、そして、トムソンの着想は、今流行のバイオニクスやバイオミメティクスへの発想にも繋がっているといえるでしょう。本書の原著は、市井にあふれる“自然の不思議を数学で説明する”とか“自然の中の規則性や法則性を説明する”といった類いの多くの書籍の出発点といえるかもしれません。

本書で取り扱われている内容そのものの面白さもさることながら、その原著が今から100年前（最初に手に取ったときから見れば80年前ですが）に著されているという事実が（当時の）わたしにとっての最大の衝撃でした。一見小難しい本のように思われそうですが、訳の文章は平易で、数式も含めて文系の高校生程度の知識があれば十分に楽しめる内容です。是非一度お手に取ってみてください。

●●●●●友の会会員より●●●●●

「身近な自然」を記録する

中村 恭子

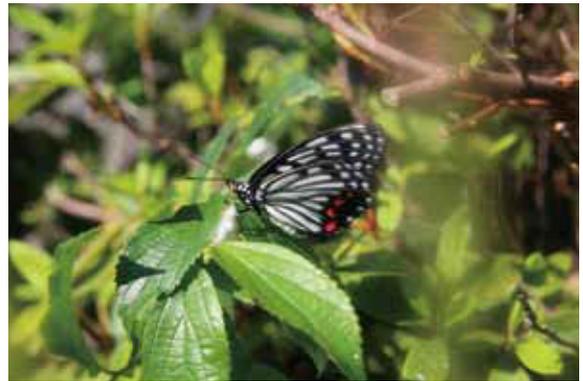
この度は寄稿の機会を頂きましたので、友の会活動を通じて学んだことを活かした、地域での活動についてお話ししたいと思います。

神奈川県西域の真鶴町に、町立遠藤貝類博物館という小さな博物館があります。開館翌年に東日本大震災が発生、職員と有志数名で文化財レスキュー活動に参加しました。砂泥にまみれた貝標本の安定化処理をしながら、標本と地域の博物館がそれを守ることの大切さを感じました。真鶴の博物館も私たちが支援しよう！と呼びかけて“遠藤貝類博物館サポーターズ（略称：貝サポ）”を立ち上げました。自然と博物館を愛する仲間が緩やかなつながりを持ち、楽しく、それぞれのスタイルで自主的に関わっています。活動内容は、展示やワークショップ、館内の整備などへの協力です。また、文化財レスキューでご縁のあった陸前高田市立博物館を支えていこうと、募金活動、図鑑や資料の寄贈などを続けています。自主活動としては、観察会や茶話会（気軽な講演と交流会の会）などを開催しています。テーマは箱根ジオパークに関連した地域の自然と歴史・文化や、自然災害と防災に関するものなど。組織作りや企画立案、実施運営にあたっては、友の会役員として博物館の様々な作業に関わった経験、友の会講座や観察会のスタッフとして学んだことが活かされました。

さて、結構な数の活動をしているうちに、これらの記録を残しておこう、メンバー以外の関心のある方にも知ってもらおうと考え、貝サポブログを作りました。トップページに登場する、トコブシとこちゃん&サザエのさーちゃんというキャラクターも誕生。しかし始めてみると、頻繁に更新しないと上位にヒットしないという問題が発生、解決するため活動報告だけでなく、日記をつけようということになりました。ブログスタッフによる「真鶴の自然日記」です。ひとつの記事を紹介しましょう。

2014/7/16

貝サポメンバーのイソヒヨドリです。



真鶴町内でも、外来種の「アカボシゴマダラ」という蝶を見かけるようになりました。神奈川県をはじめ、関東近県で分布を広げているようです。

身近にある当たり前と思っていた自然も、記録しようとする、より対象を注意深く意識してみるようになるものですね。案外たくさんの題材を見つけることができます。複数のスタッフなので、視点もそれぞれ違って刺激になります。参考になったのは、友の会通信の長寿テーマ「博物館周辺の身近な自然」です。専門分野のみならず、様々な切り口を学べました。講座で教えてもらった観察法（視覚だけでなく、聴・嗅・触・味の五感を使って）も活かせることに気づきました。空や駐車場の片隅にも目を向けてみる、実がなっていれば食べてみる。コメントの表現が豊かになってきます。月明かりを頼りに夜の森を歩いてみれば、耳、鼻、手触りすべてで察することができ、感動しました。そのワクワク感がブログでも伝わるでしょうか。「真鶴の自然日記」を続けることで、真鶴の自然史になるかもしれません。ここまで辿り着くことができたのも、生命の星・地球博物館友の会活動で得られた経験知のお陰と感謝しています。

貝博ブログはぼちぼち更新中。皆さんも、お住いの地域で「身近な自然」を記録してみませんか。

真鶴町立遠藤貝類博物館サポーターズ
ブログ <http://kaisapo2012.blog.fc2.com/>

行事案内

◆ サロン・ド・小田原プレワークショップ 「ほんもののタネ図鑑」づくり

同日開催のサロン・ド・小田原のプレ企画として行なうワークショップです。本物のタネを手に、面白さを体験してもらいながら、「ほんもののタネ図鑑」をつくりまします。

日 時：10月18日(土) 13:30～15:30

場 所：博物館1階西側講義室

講 師：野田啓司氏(海老名中学校教諭)

対 象：小学4年生以上、定員20名/オープン
(事前申込制：多数の場合は抽選)

参加費：材料費代400円/人

高校生以上の友の会非会員は500円

締切り：9月30日(火) 必着

連絡先：田口(博物館)

◆ 第113回サロン・ド・小田原 「たかがタネ、されどタネ—種子散布の世界—」

話題提供者：野田啓司氏(海老名中学校教諭)

日 時：10月18日(土) 17:30から

場 所：生命の星・地球博物館

講 演：17:30～18:30(1階西側講義室)

交流会：18:40～20:00(3階レストラン)

参加費：講演のみの参加は無料です。

交流会参加費は、1,000円/人

申込み：講演の参加は、申込み不要です。

交流会に参加される方はFAX・はがきで友の会事務局までお申込みください。

宛て先：FAX：0465-23-8846 友の会事務局宛

問合せ：博物館 0465-21-1515

(担当：田口・渡辺)

◆ 第114回サロン・ド・小田原 「現生動物を使った絶滅ハ虫類の復元」

話題提供者：松本涼子学芸員

日 時：12月6日(土) 17:30～18:30(講演)

18:40～20:00(交流会)

場所、参加費、申込み、宛て先、問合せは第113回と同様です。詳しい内容はブログでご案内します。

◆ 「地話懇話会 ～地学関連分野の話題を皆で気軽に話し合う～」…開催月の第4水曜日

実施場所：博物館 講義室

実施時間：15:00からの1～2時間

対 象：友の会々員(原則)

参加費：無料(原則)但し、内容により有料

申込み：不要

【10月の話題】

期 日：10月22日(水)

話 題：『富士山の地下の岩石について』

話題提供者：高須賀俊文氏(東京学芸大学院生)

状況により話題(講座内容)等の変更が有ります。
連絡先：中村(良)

◆ 親子植物観察会「秋を探そう」

葉っぱや実の形はどんなかな?探してみよう。

今回は子どもさんを中心に保護者と博物館周辺を歩きます。

日 時：11月9日(日) 10:00～12:00(雨天中止)

集合・解散：博物館前

申込み：不要(オープン)

対 象：小学生以下とその保護者

参加費：50円/人

担 当：友の会植物グループ

連絡先：金子

◆ よろずスタジオ

場 所：博物館1階講義室(東側)

対 象：子ども(当日の来館者)/オープン

参加費：無料

申込み：不要(当日会場にて受付)

「ドングリであそぼ!」

ドングリひろいをしたことはありますか?どんぐりはどんな木についていたのでしょうか。大きさや形の違ういろいろなドングリを観察したら、次はドングリで遊んでみよう、コマややじろべえ、どんぐり笛などもできるよ!

日 時：11月23日(日) 13:00～15:00

「魚の標本を調べてみよう」

軟らかい骨を持つサメの仲間と、アジやタイなど硬い骨を持つ魚とでは、どんなところが違うのでしょうか？本物の標本を使ってうろこやひれ、えらぶたなどを観察しましょう。

日 時：12月21日(日) 13:00～15:00

「砂と遊ぼう」

砂は、どんな色やかたちをしているかな？
どんな性質があるのかな？
砂を使って遊びながら考えてみましょう。

日 時：1月18日(日) 13:00～15:00

◆『西丹沢の深成岩、および変成岩体観察会』

晩秋の西丹沢で中川周辺に点在する深成岩体および地殻変動や熱変成を強く受けた変成岩体を観察します。

日 時：11月29日(土) 9:15～16:00頃

場 所：神奈川県山北町大滝橋～中川橋周辺

集 合：小田急線新松田駅バスロータリー横
9:15集合後9:35発のバス乗車

解 散：小田急線 新松田駅 16:00頃

講 師：山下浩之学芸員

対 象：中学生以上大人30名(抽選)

参加費：350円/人

締切り：11月18日(火) 必着

その他：状況により場所、時間等の変更が有ります。

連絡先：中村(良)

講座中止のご案内

「昆虫の細密画を描こう」(10/26、11/2)及び『植物グループ・スケッチ教室「枯れてこそ美しい」』(12/7)は、講師都合など諸事情により中止となりました。



博物館友の会主催各行事の参加申し込みについて

往復はがきに必要事項を記入して、友の会事務局までお送りください。FAXや電子メールでは受け付けませんので、ご注意ください。
行事名/開催日/参加者全員の氏名・年齢(学年)/会員番号/代表者の住所・電話番号/指定事項、ご不明な点は、友の会事務局へお問合せください。

注意！

- ★参加費は友の会会員1名分の金額で、内訳は資料代、傷害保険料です。それ以外のものは特記事項に記載があります。バスなど予約が必要な場合、参加者個々に材料を購入する場合などの講座参加確定後のキャンセルは、代わりの方をご紹介いただくか、参加費を負担していただく場合があります。
- ★オープンの行事は会員外の方も参加できます(参加費が会員とは異なる場合があります)。
- ★小学生以下の参加は保護者同伴が原則です。
- ★チラシの発行されない行事もありますので、直接〈連絡先〉へお問い合わせください。
- ★持ち物など詳細は返信はがきに記載されます。

「友の会通信」第86号は、2014年12月15日発行予定です。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会
Vol. 18, No.3, 通巻85号 2014.9.15発行
編集：友の会広報部
〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499
TEL:0465-21-1515 FAX:0465-23-8846
E-mail: kpmtomo@ybb.ne.jp
Blog: <http://blog.livedoor.jp/kpmtomo>
twitter: @kpmtomo